

2

鳥

類

サンカノゴイ

Botaurus stellaris

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

県庁カテゴリ

絶滅危

I類

選 定 理 由

国内の生息個体数が少なく、生息地である広いヨシ原が減少している。

形 態

全長 68cm、翼開長 120cm。ほぼ全身が濃い黄褐色で、体中に不規則な黄色っぽい模様がある。

近似種との区別

ゴイサギ幼鳥は、一回り小さく、全体が暗褐色である。

分布の概要

ユーラシアの温帯とアフリカ南部に分布する。国内では個体数が少なく、繁殖記録も少ない。同属は国内に生息しない。

県内の生息状況

まれな旅鳥または冬鳥として渡来する。出島湿原や那賀川下流の中州などで記録がある。

生態的特性

平地水辺の広大なヨシ原や草原を生息環境としている。
一夫多妻で繁殖、造巣・抱卵・給餌は雌だけが行う。じっと立ち止まり、鋭い嘴を急に突き出し、魚やカエル等を捕食する。外敵が巣に近づくと首をまっすぐ上に伸ばし静止する。(擬態行動)

生存に対する 脅威・保護対策

開発に伴うヨシ原の減少や農地排水事業による湿田の減少。

カラシラサギ

Egretta eulophotes

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

県庁カテゴリ

報不足

選 定 理 由

世界的に個体数が少なく、採餌環境が減少している。

形 態

全長 65cm。中型のシラサギ。夏羽では冠羽が多くボサボサしている。足指は黄色。

近似種との区別

コサギは嘴が一年中黒い。夏羽では冠羽が長い。

分布の概要

中国、朝鮮半島、台湾で繁殖し、冬は東南アジアからオーストラリアに渡る。日本には、春から秋に少数が、主に西日本各地に渡来する。コサギが留鳥として全国に普通に生息する。

県内の生息状況

吉野川河口干潟に少数が毎年渡来する。

生態的特性

日本では、入江・干潟や海岸近くの湿地・水田を生息環境としている。
国内では単独でいることが多く、活発に動いて採餌する。日本での繁殖記録はない。

生存に対する 脅威・保護対策

採餌環境である干潟や湿地の減少。

クロツラヘラサギ

Platalea minor

コウノトリ目トキ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選 定 理 由

世界的に個体数が少なく、繁殖地が限局している。県内への渡来個体数も少ない。

形 態

全長 74cm。体色は白。先が平たくてしゃもじ形の長くて黒い嘴を持ち、首も足も長い。

近似種との区別

ヘラサギと類似するが、本種は目のあたりから急に黒色部が広がり嘴の一部のように見える。

分布の概要

中国東北部および東南部と朝鮮半島西岸でのみ繁殖し、冬は中国南部から東南アジアに渡る。日本にはまれな冬鳥として渡来する。ヘラサギが中東からモンゴル・中国北部・インドにかけて繁殖分布する。日本にはまれな冬鳥として渡来する。

県内の生息状況

辰巳湿原、吉野川河口干潟や徳島市川内町のハス田などに渡来したことがある。

生態的特性

水の浅い湿地・水田・干潟などを生息環境としている。

浅い水の中をゆっくり歩き、嘴を水の中に入れ、首を左右に振って水生昆虫・甲殻類・魚などを捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

湿地の減少。

ツクシガモ

Tadorna tadorna

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選 定 理 由

国内への渡来個体数が少なく、県内では少数が渡来するだけである。

形 態

全長 63cm。白い体、緑色の頭部と風切、赤い嘴と足など、色鮮やかな大型のカモ。

近似種との区別

カワアイサ雄、ハシビロガモ雄などとやや似ているが、背の色・嘴の形・全体の模様などが異なる。

分布の概要

ユーラシア中部で繁殖し、日本には冬鳥として渡来する。九州地方、特に有明海に数百羽が飛来する。アカツクシガモがユーラシア中部で繁殖し、日本にまれな冬鳥として渡来する。

県内の生息状況

吉野川河口干潟などに冬鳥として少数渡来する。

生態的特性

広大な干潟を生息環境としている。

浅く水の被った干潟で泥の上を歩きながら、嘴で泥水の中の小動物を捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立てなどによる干潟の減少。

ハチクマ

Pernis apivorus

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

選定理由

個体数が少なく、県内での繁殖状況は十分に分かっていない。

形態

全長雌 61cm、翼開長 121 ~ 135cm。トビよりやや小さいタカで尾は円尾。色彩・模様は様々なタイプがある。飛行時首が長く見える。

近似種との区別

トビの尾は凹尾。サシバは本種より小型で翼が細い。

分布の概要

ユーラシアの温帯・亜寒帯で繁殖。中国南部から東南アジア・インドで越冬。日本には夏鳥として渡来する。同属は国内に分布しない。

県内の生息状況

県内には夏鳥または旅鳥として渡来する。夏季にも各地で確認されているが、繁殖記録は 1 例しか知られていない。

生態的特性

低山地の森林を生息環境としている。

日本には夏鳥として 5 月頃渡来し、山地森林で生活する。

低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣を造ることもある。餌としてハチ類幼虫を好む。9 月下旬から 10 月上旬に越冬地へ渡る。日本で繁殖した個体の渡り経路は、五島列島以西は不明。

生存に対する 脅威・保護対策

低山地の森林開発による繁殖環境の減少。

クマタカ

Spizaetus nipalensis

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選定理由

国内で最大のタカであり、生息数が少ない。森林生態系の頂点を占める種である。日本が主な生息地である。全国的には繁殖成功率が低下しているが、県内での繁殖状況はまだ十分に分かっていない。

形態

全長雌 80cm、翼開長 165cm。上面は黒褐色で下面は白っぽい。後頭に短い冠羽。帆翔時幅広く後ろに膨らんだ形の翼。

近似種との区別

生息環境が重なりほぼ同じ大きさのイヌワシは、体と翼の上下面とも黒褐色。

分布の概要

亜種クマタカ (*S.n.orientalis*) は日本と朝鮮半島に主に生息する。

種クマタカはヒマラヤから中国南部、インド南部、スリランカ、日本に分布。

県内の生息状況

少数が留鳥として、主に 1000m 級の山地に生息し繁殖している。

生態的特性

山地のよく茂った落葉樹林や混交林を生息環境としている。

山地森林の高い針葉樹に皿形の大きな巣を造り毎回使用する。産卵は通常 1 個。20km² 前後と広い行動圏を持つ。ノウサギ、ヤマドリ、ヘビなどを主要な餌とする。

生存に対する 脅威・保護対策

自然林伐採、林道建設による営巣環境悪化。送電線建設による事故；過去県内で 3 個体の死亡事故が確認されている。密猟。

イヌワシ

Aquila chrysaetos

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選定理由

国内最大の山ワシであり、生息数は国内で300羽～400羽と極めて少ない。北海道、本州以外での分布は九州と本県で記録があるのみ。四国で生息が確認されているのは本県のみで、発見事例は極めて少なく、四国内での絶滅の危険性が極めて大きい。

形態

全長85cm、翼開長190cm。ほぼ全身が黒褐色で、若鳥には飛翔時に翼と尾に白い部分が出る。

近似種との区別

クマタカと大きさは近いが、クマタカは翼と胴体の下面が白っぽい。しかし、光線の具合でクマタカも黒っぽく見えることも多いのでイヌワシと見間違えられることも多い。

分布の概要

北半球の中緯度から高緯度地方に広く分布し、日本には北海道から九州に少数が分布する。アジアから北ヨーロッパ、北アフリカにかけて分布するカタンロワシが日本へしばしば迷行し、県内で2回の記録がある。

県内の生息状況

1990年代前半に県西部の山間部で2羽の生息が確認されたことがあるのみで繁殖の有無も不明である。

生態的特性

急峻な地形や草原が入り交じった山岳地帯を生息環境としている。本州では50km²前後の行動圏を持つ。周年ほぼ同じ行動圏内に生息し、ノウサギ、ヤマドリ、ヘビなどを捕食する。岩棚や針葉樹に巣を造り繁殖する。

生存に対する脅威・保護対策

自然林伐採と過度の人工林化による餌となるノウサギやヤマドリなどの減少。林道建設等による営巣環境の悪化。

ヘラシギ

Eurynorhynchus pygmeus

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選定理由

世界的に分布域が極めて狭く、個体数も少ない。県内へは吉野川河口干潟にまれに渡来するのみ。

形態

全長15cm。スズメ大の小型のシギで、上面は褐色斑で覆われ、下面は白。夏羽は頭部から胸にかけて赤褐色になる。嘴は先がへら状で黒く、足も黒い。

近似種との区別

トウネンが大きさ色彩ともに酷似するが、本種の嘴はへらのような形をしている。嘴だけで他のシギ・チドリ類と区別できる。

分布の概要

シベリア東北部で局地的に繁殖し、冬季は東南アジア、インドなどに渡る。日本には旅鳥として渡来するが極めて少ない。同属の種は存在しない。(1属1種)

県内の生息状況

吉野川河口干潟にまれに渡来する。

生態的特性

干潟、干拓地の水たまりを生息環境としている。浅い水たまりなどで、小型のエビやカニなど動物質の餌を捕食する。トウネンの群に、1羽から数羽で交じっていることが多い。活動は極めて活発。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

埋立て等による干潟の減少。

カラフトアオアシギ

Tringa guttifer

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

環境庁カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

選定理由

世界的に生息数が極めて少なく、繁殖地も局地的である。県内へは吉野川河口に渡来するが極めて少ない。

形態

全長 31cm。夏羽では上面が灰褐色で黒い斑点がある。冬羽では黒い斑点がない。嘴はやや上に反る。足は黄褐色。

近似種との区別

アオアシギは足が少し長く、緑青灰色。鳴き声が異なる。

分布の概要

ロシアのサハリン南部のみで繁殖が知られている。冬季は東南アジアへ渡る。アオアシギはユーラシア北部で繁殖し冬季はアフリカ、インド、オーストラリアへ渡る。

県内の生息状況

吉野川河口干潟に渡来するが、極めて少ない。

生態的特性

河口干潟、入り江、海に近い沼を生息環境としている。干潟で小魚など水生小動物を捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

河口周辺の埋立てによる干潟の流失。埋立てによる干潟の減少。

セイタカシギ

Himantopus himantopus

チドリ目セイタカシギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

環境庁カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

選定理由

個体数が少なく、県内への渡来数も少ない。

形態

全長 32cm。嘴は細くて長い。足はピンクでとても長い。背面は黒く、雄の夏羽には青緑色の金属光沢がある。下面は白色。

近似種との区別

足がピンクで非常に長いこと、嘴がほぼまっすぐで細いこと。

分布の概要

南半球、北半球ともに中緯度帯から低緯度帯に分布。日本にはまれな旅鳥であったが、1975年以降は愛知県や千葉県などで少数繁殖する。本県には、旅鳥または冬鳥として渡来するが極めて少ない。亜種オーストラリアセイタカシギ (*H.h.leucocephalus*) はオーストラリア、ニューギニアなどに分布し、まれに日本に渡来する。

県内の生息状況

鳴門市大津町、徳島市川内町などのハス田に渡来するが、少ない。

生態的特性

海岸近くにある水のたまった水田、ハス田、湿地を生息環境としている。湿地の水辺を歩きつつ、水生小動物を捕食する。足が著しく長いこと、他のシギ類が歩けない深い水の中も歩き、時に泳ぐこともある。

生存に対する脅威・保護対策

農地改良事業による湿地の減少。ハス田の減少。

スグロカモメ

Larus saundersi

チドリ目カモメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

II類

選 定 理 由

世界の生息数はわずか数千羽であり、生息分布域も局地的である。県内への渡来数も極めて少ない。

形 態

全長 33cm。嘴は黒い。夏羽では頭部が黒く、上面は灰色、下面は白い。冬羽は頭部が白くなり、耳羽だけ黒い。

近似種との区別

ユリカモメは、嘴が赤くて細長い。

分布の概要

中国東部で繁殖し、冬は中国沿岸部や西日本で越冬する。ユリカモメは、ユーラシアの中緯度帯で繁殖し、冬は中低緯度帯で越冬する。

県内の生息状況

冬鳥として、主に吉野川河口干潟に渡来するが、極めて少ない。勝浦川河口干潟に渡来することもある。

生態的特性

干潟を生息環境としている。

干潟の上を飛びながら餌を探し、カニを見つけると急に舞い降りて嘴でくわえ捕る。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

河口周辺の埋立てにより干潟が流失すること。埋立てによる干潟の減少。

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus

チドリ目ウミスズメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

I類

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数も極めて少ない。

形 態

全長 26cm、翼開長 46cm。嘴と尾羽は短く丸みのある体形。上面は灰色で下面は白い。頭部は黒い。

近似種との区別

カンムリウミスズメは後頭が白色。頭の上に黒い冠羽がある。マダラウミスズメは嘴が細長い。

分布の概要

北半球の太平洋沿岸に分布、冬季はやや南に移動する。日本では北海道天売島、岩手県三貫島で少数繁殖する。主に冬鳥として全国的に記録がある。カンムリウミスズメは日本列島周辺海域のみに分布。

県内の生息状況

吉野川河口沖、海南町浅川湾など徳島県下の沿岸海上に、冬鳥として渡来するが、極めて少ない。

生態的特性

海上、離島を生息環境とする。

海上にすみ、水中の小魚などを捕食する。翼を使い巧みに潜水する。離島の岩のすき間などに巣を作る。

生存に対する 脅威・保護対策

重油流出による海洋汚染。

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

環境カテゴリ

絶滅危Ⅱ類

選定理由

県内の生息数は極めて少なく、絶滅の恐れが強い。

形態

全長 29.5cm。足は第 2、第 3 趾の基部が癒着する合趾足で短く赤い。嘴も赤くて幅広く大きい。頭部が黒い他は美しい濃青色。

近似種との区別

国内に近似種はいないが、強いて言えば躯幹の色からオオルリに近い。しかし、オオルリの嘴や足はブッポウソウのように赤くないので区別は容易である。

分布の概要

世界に約 10 亜種がいて、ウスリーから中国、朝鮮、日本などの東南アジア、およびオーストラリアにかけて分布する。日本へは主に本州以南に夏鳥として渡来する。ブッポウソウ科としては世界に 16 種いるが、日本に生息するのは本種 1 種のみ。

県内の生息状況

1978 年に初めて本種の繁殖が確認された。以後、那賀郡上那賀町および三好郡池田町でその繁殖が確認されたが、現在に至っては絶滅寸前の状態である。

生態的特性

スギ、ヒノキ、モミなど針葉樹の大径木のある低山の林や社寺林等を好み、生息環境としている。社寺林の大径木や電柱などに穴を開けて営巣する。山間部に架かる橋梁の隙間等も営巣場所として利用する場合がある。高い高圧線などにとまり、セミ類やタマムシ類など近寄る大型の飛翔昆虫を空中で捕らえる。

生存に対する脅威・保護対策

里山の開発に伴う大径木の減少。ハシブトガラスなど天敵の増加。

ヤイロチョウ

Pitta brachyura

スズメ目ヤイロチョウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

環境カテゴリ

絶滅危Ⅰ類

選定理由

県下で繁殖に成功するペアは、非常に少ないと推測され、近い将来その絶滅が危惧される。

形態

全長 18cm。太い嘴、ずんぐりした体型で足が長い。体色は、「八色鳥」の名の通り、コバルトブルーや緑、黒、クリーム色など多彩。特に、下腹部から下尾筒にかけての帯状の赤はよく目立つ。

近似種との区別

緑色を基調とした、きらびやかな色彩からカワセミに似るが、カワセミは嘴が長く、平地の水辺にすむなど相違点が多い。

分布の概要

夏鳥として、本州以南の山地に局地的に渡来する。高知県や宮崎県へは毎年渡来するようである。県内では山地のほぼ全域において不規則に出現するようであるが、個体数は極めて少ない。ヤイロチョウ科としては、東南アジア、オーストラリア、アフリカの熱帯地域に本種を含め約 25 種が生息する。日本ではヤイロチョウ科としては本種 1 種のみである。

県内の生息状況

局地的に極少数が渡来している模様。地上に営巣するため、外敵が多く繁殖成功率は極めて低いものと思われる。

生態的特性

標高 500m くらいの、樹冠が閉じて昼なお薄暗く、うっそうとした林に夏鳥として極少数が局地的に渡来する。地上をホッピングしながら、その強靱な嘴で地表面を掘って、主にミミズなどの小動物を捕食する。警戒心が強く、その美しい姿を見る機会は少ないが、渡来当初は比較的目立つ位置にとまり、「ピョヨー、ピョヨー」と必ず二声ずつ大声でさえずる。地上や大木のまたにコケ類、細い枯れ木、マツ葉などを使って営巣する。

生存に対する脅威・保護対策

林地における土木工事（例えば、林道、鉄塔、ダムなど）、森林の皆伐。人の接近。

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus

スズメ目サンショウクイ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

絶滅危

II類

選定理由

全国的に減少が著しく、本県でも同じ傾向にある。

形態

全長 20cm。白黒のツートンカラーで、スマートな体型。雄は額が白い他は頭部は黒い。一方雌はこの部分が灰色で、額の白も狭い。尾はくさび形。

近似種との区別

白黒の体色からセキレイ類やモズ類、ヒヨドリ類などと混同するかも知れないが、生息環境の違いや、鳴き声が全く異なっている。

分布の概要

中国東北部や朝鮮半島、日本（本州以南）などに繁殖分布する。越冬地は中国南東部やインドシナ半島などの東南アジア。日本では低山帯の林に夏鳥として渡来する。アサクラサンショウクイは全身が灰黒色で、中国南東部やインドシナ半島などに分布し、極まれに琉球諸島南部などに迷行するだけである。（別亜種リュウキュウサンショウクイは琉球諸島を中心に周年生息する）。

県内の生息状況

標高 20m から 1550m にかけて渡来し、まれにその繁殖が確認されることがある。多くは、渡りの時期に少数が市街地の緑地などを通過する程度である。観察が難しく正確な実態が把握しにくい。

生態的特性

低山帯の落葉広葉樹林に好んで生息する。高木の梢付近で細い枝葉の中にいる昆虫などを採餌している。そのため、地上からでは観察しにくい。四月下旬、数十羽の群れで渡来する折は、「ヒリヒリン・ヒリヒリン」と、まるで鈴を振るような声で鳴いているが、高空を飛ぶため、その姿はなかなか見つけられない。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖地における里山林の減少。

ホシガラス

Nucifraga caryocatactes

スズメ目カラス科

徳島県カテゴリ

絶滅危

I類

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

突発的に出現するだけで、県内に定着する個体群はいない。

形態

全長 35cm。躯幹は、黒褐色をベースに白点状の縦斑が密に並ぶ。飛ぶと、尾羽の先の白帯が目立つ。下尾筒は白く、黒い嘴はよく尖り頑丈である。

近似種との区別

体色が白黒模様である点、ホシムクドリに似るが、ホシムクドリは全長 21cm とホシガラスに比べて小さい上に、日本の亜高山帯で見られることはまずない。

分布の概要

ユーラシアの亜高山帯や、千島列島、日本などに分布する。日本では、主に本州以北の亜高山帯から高山帯にかけて生息するが、一部渡りも行われている模様。ユーラシアを中心に近縁種とは水平分布域はよく重複しているが、日本では、亜高山帯から高山帯にかけて周年生息する近縁種はいない。

県内の生息状況

1985 年秋に阿南市の離島・伊島で渡り途中のもの 1 羽が確認されているが、これは通過個体である。剣山、および一ノ森でその生息が確認されている。

生態的特性

主に、亜高山帯の針葉樹林に留鳥として生息する。マツ科の球果を好むが、地上歩行しながら登山者の捨てたゴミをあさることもある。「ガーッ・ガーッ」と鳴くしわがれ声は遠くからでもよく聞こえる。

生存に対する脅威・保護対策

亜高山帯針葉樹林の伐採。

コクガン

Branta bernicla

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

国指定天然記念物であり、県内への渡来数も少ない。

形 態

全長 61cm。小型のガン。体色は黒。

近似種との区別

シジュウカラガンは頬が白く、胴体は灰褐色である。

分布の概要

北半球のツンドラ地帯で繁殖し、冬鳥として主に北日本に渡来する。シジュウカラガンがアリューシャン列島で繁殖し、越冬地は日本とアメリカ西海岸に限局している。

県内の生息状況

少数が海岸や河口に冬鳥として渡来する。

生態的特性

波の穏やかな内湾を生息環境とする。海岸にすみ、逆立ちしてアマモやアオノリなどを食べる。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

非狩猟鳥であるが、県内で過去に射殺されたことが 2 例ある。流出油等による海岸汚染。

オシドリ

Aix galericulata

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

東アジア特産種で、日本はその主要な生息地である。県内では、個体数、生息地ともに減少している。

形 態

全長 45cm。雄の鮮やかな色模様と銀杏羽は特徴的。

近似種との区別

本種の雌と雄非生殖羽では目の周囲に白いまが玉模様があり、近似種と識別できる。

分布の概要

本種は東アジア特産種で、日本はその主要な生息地と考えられている。北海道では夏鳥、それ以外では留鳥。北アメリカにアメリカオシドリが分布する。

県内の生息状況

山間地のダム湖や広葉樹に囲まれた池に主に冬鳥として生息する。夏季にも溪流などで少数が生息する。繁殖記録もある。

生態的特性

周囲に広葉樹の茂った湖沼や河川、溪流を生息環境としている。山地の湖や沢の近くの森林の樹洞で繁殖する。冬は、平地の湖沼や河川、溪流に生息する。特に、周囲に広葉樹の茂った環境を好む。木の枝にもとまる。雑食性だが、特にドングリを好む。

生存に対する 脅威・保護対策

河畔林や池畔林の伐採。海南町海老ヶ池では、以前多数が生息したが、周回道路建設とともに生息数が激減した。

トモエガモ

Anas formosa

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

全国的にも渡来数が少なく、本県への渡来数も減少している。

形 態

全長雄 43cm、雌 38cm。雄の横顔に緑と黄色の巴模様がある。

近似種との区別

雌ではコガモやシマアジに似るが、本種では嘴の基部に小白斑がある。

分布の概要

シベリア東部で繁殖し、日本には冬鳥として渡来するが個体数は少ない。コガモが、県内各地に冬鳥として多数渡来し、本州中部以北では繁殖する。

県内の生息状況

各地の河川や池に少数が冬鳥として渡来する。

生態的特性

湖沼・河川・池など淡水域を生息環境としている。
コガモの群れに交じることが多く、昼間は水面で休息し、夜間や早朝などに水辺や水田で採餌する。
雑食性だが主に植物食である。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

河川や池の護岸工事による採餌環境の悪化。

ウミアイサ

Mergus serrator

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

元来、個体数が少なかったが、特に近年、本県への渡来数が減少している。

形 態

全長 55cm。嘴は細長く後頭部にボサボサの冠羽。

近似種との区別

カワアイサ雄は冠羽がない。同雌は首の白色部との境界が明瞭。

分布の概要

シベリアやアラスカで繁殖し、冬鳥として日本沿岸に渡来する。カワアイサやミコアイサの分布も類似するが、両種では少数が北海道で繁殖する。

県内の生息状況

冬鳥として鳴門沿岸や内湾に渡来するが近年減少している。

生態的特性

沿岸海上や内湾を生息環境とする。
水中に潜って魚を捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

主要な渡来地である橘湾や小松島湾など内湾の埋立てによる生息環境の悪化および減少。

ミサゴ

Pandion haliaetus

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

絶滅危

選定理由

海岸・湖沼など水辺生態系の頂点を占める種である。また世界で1属1種である。県内の生息数は減少傾向にあり、特に島しょ、海岸部での繁殖の減少が著しい。

形態

全長雌 63cm、翼開長 174cm。体と翼の下面および頭部が白、翼と尾と体の上面は黒褐色で翼が細長く見えるタカ。頭に短い冠羽がある。

近似種との区別

識別困難な種はない。

分布の概要

ほぼ世界中に分布し、日本では全国的に分布している。
1属1種である。

県内の生息状況

主に留鳥として生息する。冬には本州からの南下個体加わるためか個体数が増える。主に海岸近くに広く分布するが、近年海岸部での繁殖は著しく減少している。一方繁殖地を内陸部に移す傾向にあり、吉野川や那賀川の中流域、さらに河川上流のダム湖でも見られる。

生態的特性

海岸や大きな湖沼・河川を生息環境としている。
木の枝を重ねた大きな皿形の巣を、松などの樹上や海岸の岩崖の上に雌雄共同で造る。餌は魚類のみで水面上空を飛び回り、餌となる魚を見つけると急降下して捕らえる。大きな魚は両足で縦に持って運ぶ。

生存に対する脅威・保護対策

磯への釣り人の立ち入りなどによる海岸営巣適地の著しい減少。魚類の化学物質汚染。

オオタカ

Accipiter gentilis

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選定理由

低山地森林の生態系の頂点を占める種で、亜種オオタカ (*A.g.fujiyamae*) は日本固有の亜種である。県内の生息数も少ない。

形態

全長雌 57cm、翼開長 105 ~ 130cm。ハシブトガラス大で、翼は短く尾が長いタカ。上面は灰黒色、下面は白く黒い横斑がある（若鳥では胸の斑は縦斑）。白い眉斑が明瞭。飛行時尾端はやや丸い。

近似種との区別

ハイタカは酷似するがオオタカより小さい。サシバは同サイズだが翼が細長い。

分布の概要

亜種オオタカは日本固有の亜種で、留鳥として本州以南に分布し、四国でも香川県、愛媛県では繁殖記録がある。ハイタカやツミと似た分布。

県内の生息状況

主に冬鳥として、山地森林や周辺の平地の林に生息。夏季にも少数が生息するが繁殖は未確認である。

生態的特性

平地から山地にかけての森林と、農耕地などの開けた場所のある林を生息環境とする。混交林内の松など針葉樹に、木の枝で大きな巣を造る。ハト類など中型の鳥類やカモ類を捕食する。

生存に対する脅威・保護対策

餌となる鳥類の減少。営巣環境である里山の森林破壊。

ハイロチュウヒ

Circus cyaneus

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

湿地帯・乾燥草地の生態系の頂点に位置する。国内への渡来数が少なく、渡来地も局地的であり、県内の渡来数は少ない。

形 態

全長雄 43cm、雌 53cm。翼開長 98.5 ~ 123.5cm。雄成鳥は全身灰白色で翼の先端が黒い。若鳥と雌は全身茶色で翼の先端下面が白っぽく細い黒帯が数本見え、尾にも数本の黒帯がある。雄、雌、若鳥とも、腰の白いのが目立つ。飛翔時は翼をV字に保つ。

近似種との区別

チュウヒの雄成鳥は翼の先端が黒いのに加え、頭部も黒っぽい。チュウヒの雌、若鳥の翼先端と尾には黒帯が目立たない。

分布の概要

北半球の中緯度から高緯度地方に分布する。

チュウヒはバイカル湖周辺、モンゴル、アムール川流域などで繁殖し、日本では、北海道、本州で少数が繁殖する。

県内の生息状況

県東部の湿地帯や河口部のヨシ原、吉野川中流などに冬鳥として少数が渡来する。

生態的特性

広いヨシ原、草原、河原、水田地帯などの湿地帯を生息環境としている。

広い草原などで、翼をV字に保ちながら低く飛んで、小鳥やネズミなどを捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

広いヨシ原や草地の減少。餌となる小鳥類の減少。

チュウヒ

Circus spilonotus

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

選 定 理 由

湿地帯の生態系の頂点に位置する。国内で生息数が少なく、生息地も局地的であり、県内への渡来数は少ない。

形 態

全長雄 48cm、雌 58cm。翼開長 113 ~ 137cm。雄成鳥は全身が灰色で頭部と翼先端が黒い。若鳥と雌は茶色く雌成鳥の頭部はやや白っぽい。しかし体色にはいくつかのタイプがあり、個体差が大きい。

近似種との区別

本種の腰の白がハイロチュウヒに比べて不明瞭。雄成鳥はハイロチュウヒの方が全身白っぽく、頭部が黒くない。若鳥と雌はハイロチュウヒの翼先端と尾に黒帯があるのに対して本種にはない。

分布の概要

バイカル湖周辺、モンゴル、アムール川流域などで繁殖し、日本では、北海道、本州で少数が繁殖する。ハイロチュウヒは、北半球に広く分布し、日本には冬鳥として渡来する。ヨーロッパチュウヒは、ヨーロッパ、中央アジア、アフリカなどに分布し、日本にも冬季に少数が渡来しているとも言われている。

県内の生息状況

県東部の湿地帯や河口部のヨシ原、吉野川中流の草地などに冬鳥として渡来する。

生態的特性

広いヨシ原、草原、河原、水田地帯などの湿地帯を生息環境としている。

広い草原などを、翼をV字に保ちながら低く飛んで、鳥やネズミなどを捕食する。

生存に対する脅威・保護対策

広いヨシ原や草地の減少。餌となる鳥類の減少。

ハヤブサ

Falco peregrinus

タカ目ハヤブサ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

国内の生息数が少ない。鳥類の捕食者として海岸に近い陸上生態系の頂点に位置する。県内の生息数は少なく、繁殖も局所的である。

形態

全長雄 38cm、雌 51cm。翼開長 84～130cm。上面は黒い。下面は白く、黒い細かな横斑がある。若鳥は下面に茶色みがあり、黒い斑は横斑でなく縦斑。

近似種との区別

チョウゲンボウやハイタカ類と似るが、ハヤブサの顔にはびん状の黒い斑があり、飛翔時は翼先端が鋭く尖っている。

分布の概要

世界中に広く分布する。シロハヤブサは北半球の高緯度地域に分布し、冬鳥として北海道に少数が渡来する。チゴハヤブサはユーラシア大陸に広く分布し、北海道で繁殖する。

県内の生息状況

海岸部や山の崖で局地的に少数が繁殖する。冬季は営巣場所から離れた農耕地などにも姿を現す。

生態的特性

海岸部や河口部、広い湿地、広い農耕地などを生息環境としている。餌はほとんどが鳥類で、スズメ大の小鳥からカモ類やサギ類など大型のものまで、空中で捕らえる。人が近づけないような急な崖で繁殖する。

生存に対する 脅威・保護対策

湿地環境の破壊による餌となる鳥類の減少。捨てられたテグスによる事故。電線等への衝突事故。営巣地である海岸の崖への釣り人の接近。

ウズラ

Coturnix japonica

キジ目キジ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

報不足

選定理由

生息状況がよく分かっていない。県内への渡来数が少ない。

形態

全長 20cm。卵形のずんぐりした体型で、尾は短くほとんど見えない。全身茶色く、上面には白い縦斑があり、白い眉斑がある。

近似種との区別

コジュケイは大きく（全長 27cm）、尾は本種より長く、上面の白斑は目立たない。

分布の概要

ユーラシア、アフリカに分布する。日本では北海道、本州などで繁殖し、冬鳥として本州中部以南に渡来する。コジュケイは中国南部に分布しているが、大正時代に輸入したものが本州以南に広がり、繁殖している。

県内の生息状況

冬鳥として少数が広い川原の草地などに渡来していると思われる。

生態的特性

草原、川の土手や川原の草むらなどを生息環境としている。本州中部以北の草原で繁殖する。秋冬季は、草むらの中でペアまたは小群で草の種子や昆虫などを食べているが、体色が枯れ草と酷似しているため、なかなか発見できない。

生存に対する 脅威・保護対策

平地部の広い草地の減少。狩猟圧。

ナベヅル

Grus monacha

ツル目ツル科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

世界的に生息数が極めて少なく、その大部分が日本で越冬するが、県内への渡来はまれである。

形態

全長 96.5cm。胸から下は灰黒色で、首から後頭部にかけては白、目から額にかけては赤い。足は黒く、嘴は黄緑色。

近似種との区別

マナヅルはさらに大きく（全長 127cm）、胸から下は灰色で顔が赤く、足は肉色。

分布の概要

バイカル湖沿岸、モンゴル北西部、ウスリー地方などで繁殖し、冬季は中国や朝鮮半島でも越冬するが、大部分が鹿児島県と山口県など日本に渡来し越冬する。マナヅルはアムール川流域、ウスリー地方などで繁殖し、冬季は中国北部、朝鮮半島及び鹿児島県に渡来し越冬する。

県内の生息状況

まれに冬鳥または迷鳥として渡来する。

生態的特性

水田、河川などの湿地帯を生息環境としている。秋冬季は家族単位から数百羽の群れで行動することが多く、水田などで落ち穂や草の根、カニ、タニシなどを食べる。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

餌場となる水田の減少。ねぐらとなる広いヨシ原などの湿地の減少。観察者、撮影者の接近による追い立て。

タマシギ

Rostratula benghalensis

チドリ目タマシギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

県内で繁殖する数少ないシギ類である。県内での生息数は少なく、また、減少傾向が著しい。

形態

全長 23.5cm。足が短めで、ずんぐりした体型。腹の白が肩の前を通過して背中に伸びるのが特徴。雄の顔は灰色、目の周囲と目の後ろにかけてが黄色い。雌では胸が赤褐色で、目の周囲と目の後ろにかけてが白い。

近似種との区別

近似種はなく、目の周囲の模様と、腹から肩の前を通過して背中に伸びる白線とで他のシギ類とは容易に区別できる。

分布の概要

アフリカ、アジア、オセアニアの温帯から熱帯にかけて分布する。日本では本州以南に留鳥として分布する。タマシギ科は他に 1 種が南アメリカに分布するのみ。

県内の生息状況

平地や山麓の水田地帯に留鳥として生息するが、局所的で少ない。

生態的特性

水田、休耕田、沼地を生息環境としている。水田や沼地の草むらの中で少数が営巣する。鳥類では珍しく一妻多夫で、雌がさえずり、雄が巣造り、抱卵、育雛を行う。湿地で昆虫、ミミズ、植物の種子等を食べている。草むらに潜んでいることが多く、見つけにくい。繁殖期に、主に夜間にさえずる。

生存に対する脅威・保護対策

水田の乾田化、沼地の埋立て。

シロチドリ

Charadrius alexandrinus

チドリ目チドリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内で繁殖する数少ないチドリ類だが、繁殖数、渡来数ともに少なく、顕著な減少傾向にある。

形 態

全長 17.5cm。背は灰褐色で喉から腹が白。嘴と足は黒い。

近似種との区別

チドリ類は顔の模様の特徴があるが、本種は胸の帯が中央で切れている点や、額と目の上がはっきりと白いことで区別できる。

分布の概要

ユーラシア南部、アフリカ、オーストラリア、南北アメリカに分布し、日本では九州以北で繁殖する。コチドリ、イカルチドリも日本で繁殖する。メダイチドリ、オオメダイチドリはユーラシア、オーストラリアなどに分布し、日本には旅鳥または冬鳥として渡来する。

県内の生息状況

吉野川の河口干潟、那賀川の下流域や河口部で繁殖するが減少傾向が著しい。吉野川河口干潟では秋季から春季にかけて数十羽が飛来し越冬するが近年減少傾向が著しい。

生態的特性

河口の干潟、砂州、埋立て地などの荒れ地、河川中下流域の河原を生息環境としている。河口部の砂州や荒れ地の砂にくぼみを作り、営巣する。繁殖期以外は集団で行動し、春秋の渡りの時期や冬季は数十から数百羽の群れを作る。干潟や砂浜を走り回り、ゴカイなどを捕って食べる。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立て等による、採餌場所としての干潟の減少、営巣地としての砂浜、砂州の減少。営巣地への車、人の侵入。

アカアシギ

Tringa totanus

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環 庁カテゴリ

絶滅危 II 類

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数も極めて少ない。

形 態

全長 27.5cm。上面は褐色で下面は白い。夏羽では、全体に黒い斑点がある。嘴と足は赤く、次列風切と腰が白い。

近似種との区別

ツルシギは一回り大きく、次列風切が白くない。ソリハシギは嘴が上に反り、足は黄色い。

分布の概要

ヨーロッパ、中央アジア、中国北部、ウスリー地方などで繁殖し、冬季はアフリカ、インド、東南アジアなどに渡る。日本では北海道東部で少数が繁殖する。ツルシギは、ユーラシアの北部で繁殖する。冬季はアフリカ、インド、東南アジアへ渡る。

県内の生息状況

吉野川河口干潟、徳島市川内町などのハス田に旅鳥として渡来するが、極めて少ない。

生態的特性

海岸、河口干潟、ハス田などを生息環境とする。日本では主に旅鳥であるが、北海道で少数繁殖する。海岸に近い湿田や河口干潟で水生小動物を捕食する。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立てによる干潟の減少。農地改良事業などによる湿田の減少。

ホウロクシギ

Numenius madagascariensis

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

世界的に分布域が狭く個体数が少ない。県内への渡来数も少ない。

形態

全長 62cm。嘴は非常に長く下に曲がっている。全体に褐色で明瞭な斑紋はない。

近似種との区別

ダイシャクシギは下腹部、腰、翼下面が白い。

分布の概要

カムチャッカ半島、オホーツク海沿岸、中国北部、ウスリー地方で繁殖し、冬季はフィリピン、ニューギニア、オーストラリアなどへ渡る。ダイシャクシギはユーラシア中緯度帯で繁殖し、冬季はアフリカ、インド、東南アジアへ渡る。

県内の生息状況

吉野川河口干潟、那賀川河口干潟に旅鳥として渡来するが少ない。吉野川河口干潟では春の渡りの時期に比較的大きな群れが渡来することもあるが、通常は単独または数羽である。水田、ハス田に降りることもある。

生態的特性

広い干潟を生息環境とする。大規模干潟に好んで渡来する。広い干潟をゆっくりと歩きつつ、カニの穴に長い嘴をさし込んでカニを捕食する。越冬記録は少ない。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

河口周辺の埋立てによる大規模干潟の流失。埋立てによる大規模干潟の減少。

ツバメチドリ

Glareola maldivarum

チドリ目ツバメチドリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

個体数が少なく、県内への渡来数も極めて少ない。

形態

全長 26cm。嘴は短い。体の上面は褐色で、下面は淡色。尾羽は中央がくびれ燕尾状である。足は短い。

近似種との区別

日本に近似種はいない。

分布の概要

中国、東南アジアなどで繁殖し、冬は南へ移動し、オーストラリアまで渡るものもある。同属は日本には生息しない。

県内の生息状況

吉野川の中下流河川敷や造成地などに夏鳥として渡来する。数は極めて少ない。1985年6月に上板町高瀬の吉野川河原で初めて繁殖が確認された。

生態的特性

河原、干潟、休耕田を生息環境とする。宮崎県で1974年6月、日本初の繁殖が確認された。地上でも餌を捕るが、空中を飛びつつトンボやアブなどを捕食する。巣は砂れき地に造る。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖環境である砂れき地が上流のダム建設により減少。

コアシサシ

Sterna albifrons

チドリ目カモメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

全国的に繁殖適地の減少により、個体数は減少している。県内でも同様である。

形態

全長 28cm、翼開長 53cm。体の上面は灰色、下面は白色。夏羽では嘴が黄色。頭部上面が黒色、額に白斑がある。冬羽では嘴が黒色となり、額に白斑がない。

近似種との区別

アシサシは体が大きく、夏羽では嘴が黒く、額に白斑がない。

分布の概要

ユーラシア、北アメリカおよび、オーストラリアで、それぞれ中緯度帯から低緯度帯に分布し、冬季は低緯度帯へ渡る。日本には夏鳥として渡来し、本州以南で繁殖する。アシサシは、ユーラシアの中緯度帯および、北アメリカの中緯度帯で繁殖し、冬季は低緯度帯へ渡る。

県内の生息状況

かつては徳島県沿岸部及び、大河川の中流域まで普通に渡来し繁殖していたが激減した。現在では吉野川河口部から中流域にかけて数ヶ所のコロニーがあるのみ。

生態的特性

干潟、海岸、河川、水田を生息環境とする。水面上を飛びながら餌を探し、急降下して嘴から水中に飛び込み、小魚などを捕食する。砂浜や河原でコロニー（集団繁殖地）を形成する。

生存に対する 脅威・保護対策

河口周辺の埋立てによる砂州の流失。埋立てなどによる干潟や砂浜の減少。車、オートバイ、人および野犬による繁殖地の破壊。

カムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume

チドリ目ウミスズメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環境カテゴリ

絶滅危 II 類

選定理由

日本近海特産種であり、県内の個体数は極めて少ない。

形態

全長 24cm。嘴と尾羽が短く、丸みのある体形。上面は灰色で下面は白。頭部は黒いが、夏羽では後頭部が白く、黒い冠羽がある。

近似種との区別

ウミスズメは、夏羽に冠羽がない。冬羽では目の後ろの白斑がない。

分布の概要

日本列島の周辺にのみ分布する日本近海特産種。ウミスズメは北半球の太平洋沿岸に分布。日本では北海道や岩手県の離島で繁殖するものもあるが、主に冬鳥として渡来する。

県内の生息状況

牟岐町など、徳島県南部の沿岸海域に少数の生息が確認されているが、個体数は極めて少ない。繁殖は未確認。

生態的特性

海上、離島を生息環境としている。海上にすみ、翼を使って巧みに潜水し、小魚を捕食する。ウミスズメ同様、海面すれすれを直線的に飛ぶ。離島の岩のすき間などに巣を造る。

生存に対する 脅威・保護対策

重油流出などによる海洋汚染。繁殖地（離島）への釣り人等人的の立ち入り。

コノハズク

Otus scops

フクロウ目フクロウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

生息適地が狭い範囲に限定されていて、現状のままでは個体数の回復が困難と認められる。

形態

全長 20cm。全身茶褐色で、複雑な枯れ葉模様。優れた保護色となっている。耳のように見える羽角があり、目の虹彩は黄色。全身赤褐色みが強い赤色型がある。日本産フクロウ類の中では最小。

近似種との区別

ヨタカやアリスイなどフクロウ科以外の鳥種とは、顔面が垂直に切断されたように見えるフクロウ類に特有の顔盤の有無によって区別は容易。

分布の概要

ウスリーから中国、インド、中近東、地中海地方などユーラシア東部、南部および日本、フィリピン、インドネシアなどに分布する。日本へは全国の山地の林に夏鳥として少数が渡来し繁殖する。オオコノハズクは、ユーラシア南東部および、東南アジアに留鳥として周年生息する。

県内の生息状況

主に剣山山系の針葉樹林帯やブナ帯の極限られた森に少数渡来する。上勝町高丸山のブナ林で 1994 年、その繁殖が初めて確認された。他所においても、極少数が毎シーズン繁殖しているものと推測される。

生態的特性

標高 1000m を超える針葉樹林やブナ林等、人里からは遠く隔絶された深山に夏鳥として 5 月上旬ごろ渡来し、繁殖後は 9 月中には越冬地へ向かって渡去する。

高いよく通る声で「コッ、キョッ、コー・コッ、キョッ、コー」と夜間（まれに日中も）よくさえずる。巣は天然の樹洞やキツツキ科の鳥の古巣、人工の巣箱等を利用する。夜蛾や甲虫など昆虫類が主食。春秋の渡りのシーズンには阿南市の離島・伊島など平地の林でも観察されることがある。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖地であるブナ林などへの多数の人の頻繁な立ち入り、および立木の伐採を伴う開発など。特に、広範囲なブナ林の皆伐。

ヨタカ

Caprimulgus indicus

ヨタカ目ヨタカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

大型昆虫類捕食者であるため、大型昆虫の減少に伴い近年個体数の減少が著しい。

形態

全長 29cm。全身黒褐色の枯葉模様で保護色となっている。嘴はやや下方に曲がって短いが、口は大きく裂けている。上嘴の基部に列生する鬚（剛毛）がよく発達している。

近似種との区別

夜間、飛翔時に、そのシルエットがタカ類に似るが、タカ類が夜間飛ぶことはまずない。オオコノハズクやアオハズクは平らな顔、つまり顔盤があり、容易に区別できる。

分布の概要

ユーラシア東部および東南部一帯やスリランカ、日本などに繁殖分布する。日本では九州以北の低山帯に夏鳥として渡来する。1 目 1 科 1 属 1 種で、国内に近縁種はいない。

県内の生息状況

標高 1400m 付近までの二次林で局所的に少数が生息する。繁殖期にさえずりを聞く機会も少ない。個体数の減少が著しい。

生態的特性

低山帯の雑木林を主な生息場所としている。焚き火跡の消し炭が散乱する場所に産卵する傾向がある。地面または横枝などに腹ばい状態で静止していて、決して足を伸ばして止まることはない。夜行性で、昼間、積極的に活動することはない。夜間、雄は単調な声で「キョッキョッキョッキョッキョ…」と鳴く。飛びながら蛾類や甲虫類など飛翔昆虫を捕食する。

生存に対する脅威・保護対策

道路の建設、宅地化、雑木林の伐採、および小規模農業の衰退等による里山の自然の喪失。

ヤマセミ

Ceryle lugubris

ブッポウソウ目カワセミ科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

近年個体数の減少が著しい。

形 態

全長 37.5cm。くちばしが長く、白黒まだらの「鹿子模様」が顕著。時に冠羽を逆立てる。下面は白いが、雄は胸に薄い褐色斑がある。

近似種との区別

体の白黒模様からホシガラスやキツツキ類に似るが、高山鳥のホシガラスとは生息環境が全く違う。また、キツツキ類は樹幹に対して平行にとまるので区別は容易である。

分布の概要

朝鮮半島からインドシナ、ヒマラヤ地方にかけてのユーラシア南東部、および日本に分布する。日本では九州から北海道まで、全国の限られた溪流部に少数分布する。アカショウビンやカワセミなどの近縁種とは分布域がよく重複している。しかし、アカショウビンは低山帯の深い森に、カワセミは平地にそれぞれ生息するのに対し、本種は大きな河川の上流部に周年生息する。

県内の生息状況

かつて（1984 年頃まで）は、川魚の養殖業者によって違法に撃ち落とされる程豊富に生息していたが、現在では主な河川の上流部やその支流に多くて 2～3 ペアぐらいつつしか生存していないものと思われる。

生態的特性

限られた大きな河川の中流部から上流部やダム湖などにおいて、水面から遠く離れることはない。カワムツ、オイカワ、アマゴなど比較的大きな川魚をダイビングして捕らえる。尾羽を直立させ、尖った冠羽を逆立てる動作をしきりに行う。川面すれすれに飛びながら「ケッケッケツッ…」と鳴いていることがある。

生存に対する 脅威・保護対策

ダムによる河川の生態系の破壊。拡大造林による落葉広葉樹林の減少。釣り人等人の接近。河川や道路路面のコンクリート化による営巣場所の減少。

ウチャマセンニュー

Locustella pleskei

スズメ目ウグイス科

徳島県カテゴリ

絶滅危 II 類

環 庁カテゴリ

絶滅危 II 類

選 定 理 由

渡来数が少なく、しかも局地的にしか生息しない。

形 態

全長 17cm。上面は褐色みがあり、白い眉斑が顕著。下面は褐色がかった白色。

近似種との区別

シマセンニューよりも嘴が約 3mm 長く、尾や足もやや長い。シマセンニューを除く他のセンニュー類やオオヨシキリなどとはさえずりが全く違う。

分布の概要

本州（福島県以南）から九州北部にかけての海岸に近い離島に生息する。国外では、朝鮮半島の西海岸や中国東部に記録があるが、詳しい生態はよく分かっていない。シマセンニューは北海道以北で繁殖し、本州以南では渡りの季節に通過するのみ。シマセンニューは湿地を好むのに対し、本種はより乾燥した環境を好む。

県内の生息状況

毎年、特定の離島に渡来し、繁殖している模様。1 シーズンに 2 回繁殖した記録がある。少なくとも 1 ペアくらいは繁殖に成功しているものと考えられる。

生態的特性

夏鳥として県東部の海岸に近い特定の小島に渡来し、シダ類のヒトツバがびっしり生い茂った急斜面で繁殖する。乾いた草地の中を潜行するだけで、めったに姿を見せない。繁殖期にはかん木の上などにとまり「チッチョリジョリジョリ…」と聞こえる声でさえずる。

生存に対する 脅威・保護対策

本県では生息地が限られた小さな離島であるため、情報の漏洩、人間の立ち入りなど。

エゾムシクイ

Phylloscopus borealoides

スズメ目ウグイス科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内では生息数が極めて少なく、局地的である。また、1986年に木沢村高丸山で5雛が育つ巣が発見されたが、恐らくこれが本種の繁殖地南限記録に近いものと思われ、その意味において貴重である。

形 態

全長12cm。上面はオリーブ褐色で下面は灰白色、白い眉斑が明瞭。腰と上尾筒に赤褐色みがある。ムシクイ類に特徴的なスマートな体型。

近似種との区別

メボソムシクイやセンダイムシクイとはさえずりが全く違う。イジママムシクイやカラフトムシクイ、キマコムシクイは分布が局地的であったり、地鳴きや腰の色が相違している。

分布の概要

日本、南千島、サハリンなどで繁殖し、中国南東部、インドシナ半島などで越冬する。日本では、亜寒帯林に夏鳥として渡来し、主に本州以北で繁殖する。近縁種はいずれもユーラシアに分布するが、本種の分布域は上記の通り狭い。日本では、メボソムシクイは四国以北、センダイムシクイは九州以北の山地の林にそれぞれ渡来し、繁殖する。

県内の生息状況

渡りの時期には平地でも少数確認されることがある。亜高山帯で、極少数が繁殖する模様。

生態的特性

繁殖期には亜高山帯の針広混交林に生息するが、春秋の渡りの時期には、平地の山ろくの林を通過することがある。

下生えの中を枝移りしながら、主に昆虫類を捕食する。さえずりは「ヒーターチー・ヒーターチー」と聞こえる。非繁殖期に鳴く地鳴きは「ピッ・ピッ」と聞こえ、特徴的である。

生存に対する 脅威・保護対策

特に、剣山山系の亜高山帯針葉樹林の伐採など。

キバシリ

Certhia familiaris

スズメ目キバシリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

Ⅱ類

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息適地が限られている上に、県内では個体数が少ない。

形 態

全長14cm。樹幹をずり上げるのに都合よく爪が長い。特に後趾のそれは著しく発達している。下面は白いが、上面の茶褐色の斑模様は、樹皮の色によく溶け込み保護色となっている。

近似種との区別

同じく樹幹を生活の場としているゴジュウカラやキツツキ類とは、上面の色がゴジュウカラは青灰色で、キツツキ類のそれは白黒の斑模様となっており区別は容易である。

分布の概要

ユーラシアや北アメリカの温帯から亜寒帯にかけて広く分布する。日本では、九州以北のブナ林や針葉樹林帯に留鳥として周年生息する。日本では近縁種はいない。

県内の生息状況

分布は局地的である。大径木が残る社寺林や、ブナ林などに少数が生息する。

生態的特性

樹齢数百年の大径木が生い茂る深山に生息する。近年そのような環境は局地的にしかなく、その近隣のスギ林等人工林にも生息する。

樹幹をらせん状にずり上がりながら、昆虫やクモ類、小型の陸貝等を捕食する。樹頂近くまで登り詰めると、隣の木に舞い降りて同じ行動をくり返す。鳴き声は高音で、「チーッ・チーッ・チリチリチリ」とか、「ツー・ツー」とも鳴く。

生存に対する 脅威・保護対策

大径木が交じる社寺林やブナ林の伐採、あるいはそれらに隣接する森林の伐採など。

カムリカイツブリ

Podiceps cristatus

カイツブリ目カイツブリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内の繁殖地が限定された種であり、県内への渡来数も減少している。

形 態

全長 56cm。カイツブリ類の中で最大で、特に首が長い。足指には木の葉形の弁膜がある。

近似種との区別

アビヤオオハムは首が短い。アカエリカイツブリは目の上が白くない。

分布の概要

ユーラシアの中緯度地方の湖沼に広く分布し、オーストラリアやアフリカでも繁殖する。日本には冬鳥として各地の湖沼や河川、内湾に渡来する。青森県や滋賀県などでは少数の繁殖が記録されている。カイツブリが日本全国で繁殖している。アカエリカイツブリは主に冬鳥として渡来するが、一部北海道で繁殖する。ミミカイツブリとハジロカイツブリは冬鳥として渡来する。

県内の生息状況

冬鳥として渡来し、小松島湾、橘湾、吉野川や那賀川の河口など広い静水域に生息する。

生態的特性

湖沼、大きな川の河口、内湾などを生息環境とする。
潜水を繰り返す、好んで魚類を捕食する。

生存に対する 脅威・保護対策

県内の主要な生息地である小松島湾、橘湾で埋立てが進行中。

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内では個体数が少なく、減少傾向にある。

形 態

全長 37cm。黄褐色の小型のサギ類で、飛行時、雨覆の黄土色と風切の黒色の対比が明瞭。

近似種との区別

オオヨシゴイは背中が栗色。

分布の概要

ユーラシア東南部の温帯から熱帯で繁殖。日本には、夏鳥として渡来し、全国で繁殖。オオヨシゴイが日本に夏鳥として渡来するが、個体数は多くない。リュウキュウヨシゴイが奄美諸島や琉球諸島に分布。

県内の生息状況

東部や南部の低湿地のヨシ原やガマ群落に生息する。繁殖記録・個体数ともに少ない。

生態的特性

平地の水辺でヨシやガマの茂った湿地を生息環境とする。
水中から草が生えている所を好み営巣。ヨシ・ガマなどの茎や葉を折り曲げ皿型の巣を造る。水面近くで待ち伏せ型の採餌。外敵が巣に近づくと首をまっすぐ上に伸ばし静止する。(擬態行動)

生存に対する 脅威・保護対策

開発に伴うヨシ原の減少や農地排水事業による湿地の減少。

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

絶滅危

選 定 理 由

繁殖記録があるのは日本だけである。県内の生息個体数は少ない。

形 態

全長 49cm。焦げ茶色の小型のサギ。飛行時雨覆は褐色で風切が黒い。

近似種との区別

ゴイサギ幼鳥に似るが、本種は体に淡色の斑点が無い。

分布の概要

東部アジアに分布し、日本には夏鳥として渡来する。ズグロミゾゴイが八重山諸島に留鳥として生息するが少ない。

県内の生息状況

標高 1000m ぐらいまでの山林に生息し繁殖するが少ない。

生態的特性

山地の暗い林を生息環境とする。
高木の樹上に、木の枝を材料にした粗雑な皿形の巣を造る。夜行性で、林の中の沢や溪流で、サワガニやミミズなどを捕食する。外敵が巣に近づくと首をまっすぐ上に伸ばし静止する。(擬態行動)

生存に対する 脅威・保護対策

山林開発による林の減少と涸れ沢化。

アカガシラサギ

Ardeola bacchus

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内に渡来する個体数が少ない。

形 態

全長 45cm。翼は白く、頭から背は赤褐色～黒褐色。

近似種との区別

冬羽はササゴイ若鳥に似るが、本種は翼と尾が白い。

分布の概要

主に東アジアから東南アジアに分布する。国内では、西日本での観察記録が増えつつあり、熊本・秋田で繁殖記録がある。同属は国内に生息しない。

県内の生息状況

東部海岸沿いの湿田やハス田で、主に冬鳥として生息するが少ない。

生態的特性

海岸近くの水田・湿田・湖沼を生息環境とする。
水辺で待ち伏せ、あるいは湿田などを歩きながら魚やカエル、トンボなどを捕食する。シラサギ類やゴイサギに交じって行動することも多い。

生存に対する 脅威・保護対策

開発に伴うヨシ原の減少や農地排水事業による湿田の減少。また、非狩猟鳥にもかかわらず、県内では射殺された例がある。

チュウサギ

Egretta intermedia

コウノトリ目サギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

県庁カテゴリ

絶滅危

選 定 理 由

個体数が少なく、繁殖できる環境が減少している。

形 態

全長 69cm。シラサギ類の 1 種。首と足は長いが嘴は短い。

近似種との区別

本種は嘴が相当短く見える。コサギは足指が黄色。ダイサギの口の切れ込みは目の下を越える。

分布の概要

アメリカを除く、熱帯・温帯で広く繁殖。日本には主に夏鳥として全国に渡来し繁殖する。西南日本では一部が越冬する。コサギとダイサギが留鳥として生息する。

県内の生息状況

平野部各地の山林や竹林で繁殖する。

生態的特性

平地の水田や湿地を生息環境とする。
他種のサギ類に交じって集団で竹林や雑木林で営巣することが多い。昼行性で、浅い水辺で魚やカエル、昆虫などを捕食する。

生存に対する 脅威・保護対策

平地林の消失、水田の農薬散布。

コハクチョウ

Cygnus columbianus

カモ目カモ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

県庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数は少ない。

形 態

全長 120cm、翼開長 177cm。全身が白色。嘴の先は黒く、基部は黄色。

近似種との区別

オオハクチョウに比べ、嘴の黄色部が小さく先端が丸い。アメリカコハクチョウの嘴はほとんどが黒。

分布の概要

ユーラシアと北米の寒帯で広く繁殖する。日本には、冬鳥として渡来し、北日本や日本海側に多い。オオハクチョウがユーラシアの高緯度地方で繁殖する。

県内の生息状況

まれな冬鳥として、少数が平野部の河口やため池、水田などに渡来する。県内へ渡来するものはほとんどが若鳥である。

生態的特性

湖沼・河川・水田・湿地を生息環境とする。
家族群で生活し、水草を餌とする。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

発砲後回収されずに野外に残った鉛製の猟銃弾を誤飲することによる鉛中毒。

ハイタカ

Accipiter nisus

タカ目タカ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

絶滅危

選定理由

小型の鳥獣の捕食者として森林生態系の頂点に位置するタカで、県内での生息数は少ない。

形態

全長雌 39cm、翼開長 62～76cm。キジバト大の小型のタカ。飛行時尾が長く腰が白く見える。白い眉斑がある。

近似種との区別

ツミとよく似ており上空飛行時には識別は困難。顔が見える場合、眉斑や頬の黒さで識別できる。

分布の概要

ユーラシアの温帯・亜寒帯で繁殖する。亜寒帯で繁殖するものは南下して、越冬する。国内では本州以北の山林で繁殖する。冬には全国で見られ、平地の林や農耕地にも飛来する。オオタカやツミと似た分布状況だが近年減少が著しい。

県内の生息状況

冬鳥あるいは旅鳥として山地森林や耕作地に生息。繁殖期にも生息記録があり、少数が繁殖している可能性もある。

生態的特性

平地から亜高山帯の林を生息環境とする。主に針葉樹の樹上に木の枝を重ね、皿形の巣を雌雄共同で造る。雛への給餌は雌だけが行う。主に小鳥を捕らえ餌とするが、ネズミなども捕る。

生存に対する脅威・保護対策

山地森林の伐採。

クイナ

Rallus aquaticus

ツル目クイナ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

県内への渡来数が少なく、採餌環境が減少している。

形態

全長 29cm。ずんぐりした体型だが足と嘴が長め。全身茶色く見えるが、上面は黒い縦斑で覆われ、腹部は白黒の縞模様になっている。

近似種との区別

ヒクイナはかなり小さく（全長 22.5cm）嘴も短めで、頭部から腹部が赤茶色で足は赤い。

分布の概要

ユーラシアに広く分布し、日本では多くが冬鳥だが、北海道と本州北部では繁殖する。ヒクイナはアジア東部を中心に分布し、日本でも繁殖する。

県内の生息状況

冬鳥として平地の湿地に渡来するが、個体数は少ない。

生態的特性

水田、ヨシ原、河川、沼の畔などを生息環境とする。日本では北海道と本州北部で繁殖する。湿地を歩き回りエビ、小魚、昆虫、植物の種子などを食べるが、警戒心が強く姿を見ることは少ない。群れになることはない。

生存に対する脅威・保護対策

湿地の減少。

ミヤコドリ

Haematopus ostralegus

チドリ目ミヤコドリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内への渡来数が少なく、県内でも吉野川河口と那賀川河口に時々少数が渡来するのみである。

形 態

全長 45cm。上面は黒、下面は白と、コントラストが明瞭で、嘴は赤くて長く、足は短めで赤みが強い肉色。

近似種との区別

国内に近似種はなく、白黒の体と赤くて長い嘴で他のシギ・チドリ類とは容易に区別できる。

分布の概要

シベリア東部、中国東部、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニア、南アフリカなどで繁殖し、冬季は南へ渡るものがある。日本には旅鳥または冬鳥として少数が渡来する。国内には近縁種は分布しない。

県内の生息状況

吉野川河口と那賀川河口の干潟に、時々 1 羽から数羽が渡来し、まれに越冬する。

生態的特性

海岸や河口の干潟、砂浜を生息環境とする。
縦に薄く鋭い嘴を利用して、砂の中にすむ二枚貝を開いて食べるという特技を持つ。日本では単独か数羽の小群でいることが多い。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立て等による干潟の減少とそれに伴う二枚貝等の減少。

オオメダイチドリ

Charadrius leschenaultii

チドリ目チドリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内への渡来数が少ない。県内でも吉野川河口干潟に少数が渡来するのみ。

形 態

全長 21.5cm。嘴は黒く、足は黄色い。背は褐色で、喉と腹は白。夏羽では胸の帯が赤褐色、冬羽では胸の帯は背と同じ褐色になる。

近似種との区別

メダイチドリよりも本種の方が嘴も足も長く、メダイチドリの足が黒っぽいのに対して、本種は黄色みが強い。

分布の概要

中央アジアで繁殖し、冬季は東南アジア、オーストラリア、インド、アフリカ東部などに渡る。日本には旅鳥として渡来するが少ない。メダイチドリがアジア、アフリカ、オーストラリアに分布し、日本には旅鳥として渡来し、渡来数は本種よりもかなり多い。

県内の生息状況

吉野川河口干潟に旅鳥として 1 羽から数羽の渡来が確認される。

生態的特性

干潟を生息環境とする。
干潟を走り回ってゴカイなどを捕って食べる。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立て等による干潟、特に泥質干潟の減少。

ヒバリシギ

Calidris subminuta

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内への渡来数が少ない。県内への渡来も極めて少なく、局地的である。

形 態

全長 15cm。スズメ大の小型のシギで、嘴は黒く、足は黄色。上面は茶と黒の斑に覆われ全体に茶色みが強く、背に V 字の白線がある。

近似種との区別

アメリカヒバリシギは、のどから胸にかけて縦斑がある。

分布の概要

東部シベリアで繁殖し、冬季は東南アジア、インド、オーストラリアなどに渡る。日本には旅鳥として少数が渡来する。アメリカヒバリシギは南北アメリカに分布する。

県内の生息状況

徳島市川内町や鳴門市大津町、松茂町などのハス田で時々 1 羽から数羽の渡来が確認される。

生態的特性

池沼畔、水田、干拓地の水たまり、川岸、中州などを生息環境とする。
浅く水のたまった湿地で、トウネンなどの群れに単独または数羽で交じって行動することが多く、昆虫、小貝類、植物の実などを食べる。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

ハス田、沼地の減少。

オジロトウネン

Calidris temminckii

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内への渡来数が少ない。県内への渡来も少なく、局地的である。

形 態

全長 14.5cm。スズメ大の小型のシギで、上面と頭から胸は灰褐色で、腹部は白い。嘴は黒く、足は黄緑色。

近似種との区別

トウネンに比べて上面の色が灰色みが強く、トウネンは脚の色が黒い。

分布の概要

ユーラシア北部で繁殖し、冬季は東南アジア、インド、アフリカなどに渡る。日本へは旅鳥または冬鳥として少数が渡来する。トウネンはユーラシア、アフリカ、アラスカに分布する。

県内の生息状況

松茂町、徳島市川内町などのハス田で数羽の渡来・越冬が確認される。

生態的特性

池沼畔、水田、干拓地の水たまり、川岸、中州などを生息環境とする。
浅い水たまりで小群で行動し、昆虫類などを捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

ハス田、沼地の減少。

アメリカウズラシギ

Calidris melanotos

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

国内への渡来数が極めて少ない。県内への渡来もまれで少なく、局地的である。

形 態

全長 22cm。上面は黒褐色の斑で覆われ、腹は白い。胸には褐色の明瞭な縦斑があり、縦斑部と白い腹部との境がはっきりしている。嘴は黒く、足は黄色い。

近似種との区別

ウズラシギは頭頂部が赤褐色で、胸の縦斑がアメリカウズラシギに比べると不明瞭。

分布の概要

北アメリカ北部、シベリア東部北極海沿岸で繁殖し、冬季は南アメリカ、東南アジア、オセアニアなどに渡る。日本にはまれな旅鳥として渡来する。ウズラシギはシベリア北東部、アジア東部、オセアニアなどに分布する。

県内の生息状況

徳島市川内町、松茂町などのハス田にまれに 1 羽から数羽の渡来が確認される。

生態的特性

海岸に近いハス田、水田、干拓地の水たまりを生息環境とする。浅い水たまりでウズラシギなどに交じって単独または数羽で行動し、昆虫などを捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

ハス田、池沼の減少。

キリアイ

Limicola falcinellus

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

1 属 1 種で、個体数が少なく、繁殖地も一部しか判明していない。国内への渡来数も少ない。県内への渡来も極めて少なく、局地的である。

形 態

全長 17cm。上面は褐色斑で覆われ、下面は白い。嘴、足ともに黒く、長めの嘴は先端がやや下に曲がっている。目のすぐ上と側頭部を通る 2 本の白線がある。

近似種との区別

嘴が長めで下に曲がっていることと、頭部に 2 本の白線があることで他のシギ・チドリ類と区別できる。

分布の概要

シベリア東北部、スカンジナビア半島などで繁殖し、冬季はオーストラリア、東南アジア、インド、中東などに渡る。日本には旅鳥として渡来するが少ない。同属の種は存在しない（1 属 1 種）。

県内の生息状況

吉野川の河口や下流部の干潟、徳島市川内町のハス田などに渡来するが極めて少ない。

生態的特性

干潟、水田、ハス田などを生息環境とする。
干潟や浅い水の中で、カニ類、貝類、昆虫などを捕食する。トウネンの群れに交じることが多い。
日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立て等による干潟やハス田の減少。

オオハシシギ

Limnodromus scolopaceus

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来も極めて少ない。

形 態

全長 29cm。嘴は長くまっすぐで黒っぽい、付け根近くは肉色をしている。足は黄緑色。夏羽の上面は褐色斑で覆われ、頭部から胸、腹部にかけて赤褐色。冬羽の上面は黒褐色で、頭部から胸にかけて褐色の縦斑があり、下面は白く、胸側から脇には褐色の横斑がある。

近似種との区別

シベリアオオハシシギは嘴全体が黒い。足も黒く本種より長い。アメリカオオハシシギは嘴が本種より短く、三列風切が虎斑模様であること、尾羽の白黒の帯が黒帯より白帯の方が幅広いことで区別するが、野外での区別は極めて難しい。

分布の概要

シベリア北東部、アラスカなどで繁殖し、冬季は北アメリカ南部などに渡るが、少数が日本にも渡来する。シベリアオオハシシギはオビ川流域、バイカル湖東南部、モンゴル、中国東北部などで局地的に繁殖し、冬は東南アジアなどに渡り少数が日本に渡来する。アメリカオオハシシギは北アメリカ北部で繁殖し、冬季南アメリカ等へ渡るが、日本にも極めてまれに渡来する。

県内の生息状況

吉野川河口干潟、徳島市川内町のハス田などにまれに渡来する。

生態的特性

水田、ハス田、干潟を生息環境とする。
浅い水たまりの泥の中に嘴を差し込み、上下に動かしながら泥の中の小動物を捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立て等による干潟、ハス田の減少。農地改良事業による湿田の減少。

シベリアオオハシシギ

Limnodromus semipalmatus

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

報不足

選 定 理 由

世界的に生息数が少ない。繁殖例も、西シベリア、中国東北部など限られた地点で知られるのみであり、県内への渡来数も極めて少ない。

形 態

全長 33cm。嘴はまっすぐで長い。夏羽は全体に赤褐色で、上面に黒斑がある。冬羽は上面が灰色、下面が白色。足は黒い。

近似種との区別

オオハシシギおよびアメリカオオハシシギは、足が黄色く腰に明瞭な白斑がある。オオソリハシシギは嘴が上へ反っている。オグロシギは尾に太い黒帯がある。

分布の概要

オビ川流域、バイカル湖周辺、モンゴル、中国東北部などで繁殖し、冬は、インド、タイ、スマトラ島などに渡る。日本には、迷鳥または、極めてまれな旅鳥として渡来する。オオハシシギは、シベリア北東部、アラスカなどで繁殖し、冬季は北米南部、中米などに渡る。アメリカオオハシシギは北米北部で繁殖し、冬季は中南米へ渡る。日本にも極めてまれに渡来する。

県内の生息状況

吉野川河口の干潟、徳島市川内町のハス田に渡来するが極めてまれ。

生態的特性

海岸、河口の干潟、入り江、ハス田を生息環境とする。
浅い水中を歩きながら、泥の中の貝やゴカイなど小動物を食べる。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

農地改良事業などによる湿田の減少。埋立て等による干潟の減少。

オグロシギ

Limosa limosa

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数も少ない。

形 態

全長 38cm。嘴はまっすぐで長い。夏羽は頭部から胸が赤褐色。冬羽は全体に灰褐色である。尾羽に太い黒帯がある。

近似種との区別

オオソリハシシギは嘴が上に反っている。夏羽では頭部から下腹部まで赤褐色である。尾に太い黒帯はない。

分布の概要

ユーラシアの中緯度帯で繁殖し、冬はアフリカ、インド、オーストラリアへ渡る。日本には旅鳥として渡来する。オオソリハシシギはユーラシアの北部とアラスカで繁殖し、冬季はアフリカ、東南アジア、オーストラリアへ渡る。

県内の生息状況

吉野川河口干潟、那賀川河口干潟、徳島市川内町のハス田、松茂町中喜来のハス田などに渡来するが、少ない。

生態的特性

河口の干潟、ハス田を生息環境とする。
浅い水たまりの中を歩きながら土の中に嘴をさし込み、水生小動物を捕食する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

埋立てによる干潟の減少。農地改良事業による湿田の乾田化、ハス田の減少。

ダイシャクシギ

Numenius arquata

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数も少ない。

形 態

全長 60cm。嘴は非常に長く、下に曲がっている。全体に褐色であるが、下腹部と腰、翼下面は白い。

近似種との区別

ホウロクシギは下腹部、腰、翼下面ともに白くない。

分布の概要

ユーラシア中緯度帯で繁殖し、冬季は、アフリカ、インド、東南アジアへ渡る。日本には主に旅鳥として少数渡来する。ホウロクシギはカムチャッカ半島、ウスリー地方などで繁殖し、冬季はオーストラリア、ニューギニアなどへ渡る。

県内の生息状況

吉野川河口干潟や那賀川河口に単独または数羽が旅鳥として渡来するが少ない。極めて少数が越冬する。

生態的特性

広い干潟を生息環境とする。
干潟をゆっくり歩き、カニ穴を見つけると長い嘴をさし込んでカニを捕食する。少数が越冬する。日本では繁殖しない。

生存に対する 脅威・保護対策

河口の周辺の埋立てによる干潟の流失。埋立てによる干潟の減少。

オオジシギ

Gallinago hardwickii

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

絶滅危

選定理由

分布域が局地的で極めて小さく、個体数も少ない。県内への渡来数も少ない。

形態

全長 30cm。嘴はまっすぐで長い。上面は褐色で黒褐色と赤褐色の斑点がある。胸、脇を除く下面は白い。

近似種との区別

外見から区別することは困難であるが、体の測定値と尾羽枚数により区別する。尾羽枚数は、タシギが 14 枚。オオジシギが 18 枚。チュウジシギが 18～22 枚、ハリオシギが 26 枚。

分布の概要

日本と、ロシアのサハリン南部で繁殖し、冬季はオーストラリアへ渡る。タシギはユーラシアの中緯度帯から北部、北アメリカの中緯度帯から北部で繁殖し、冬季はアフリカ、インド、中米へ渡る。チュウジシギは中部シベリアで繁殖し、冬季はインド、東南アジアへ渡る。

県内の生息状況

主に旅鳥として、ハス田や水田に渡来するが、西祖谷山村腕山では夏季の観察記録がある。愛媛県の四国カルストでは繁殖記録がある。

生態的特性

繁殖期、北海道では平地にすむが、本州、四国では高原にすむ。渡り時期には水田、ハス田、湿地に渡来する。

繁殖期、雄は「ジジジジズビャック、ズビャック」と鳴きつつ飛び回り、急降下する。この時、尾羽を開いて「ガガガガ」という音を発する。水辺の泥にすむ小動物を捕食する。

生存に対する脅威・保護対策

農地改良事業による湿田の減少。埋立てによる湿地の減少。

ハシブトアジサシ

Gelochelidon nilotica

チドリ目カモメ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

個体数が少なく、県内への渡来数が少ない。

形態

全長 37cm、翼開長 108cm。嘴は黒く、体は上下面ともに白い。夏羽では、頭部の上面だけが黒くなる。

近似種との区別

アジサシは体が少し小さくて、外側尾羽が非常に長いことで区別できる。

分布の概要

ユーラシア、オーストラリア、南北アメリカの中緯度帯で繁殖し、冬は低緯度帯へ渡る。アジサシはユーラシアの中緯度帯および北アメリカの中緯度帯で繁殖し、冬は低緯度帯へ渡る。

県内の生息状況

まれな旅鳥として、吉野川河口干潟に渡来する。

生態的特性

干潟を生息環境とする。

干潟の上を飛びながら餌を探し、カニを見つけると急に舞い降りて嘴でくわえ捕る。日本では繁殖しない。

生存に対する脅威・保護対策

河口周辺の埋立てによる干潟の流失。埋立てによる干潟の減少。

ジュウイチ

Cuculus fugax

カッコウ目カッコウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数が少ない。

形 態

全長 32cm、翼開長 56cm。上面は灰黒色で腹は赤褐色。尾羽には黒い横帯斑がある。

近似種との区別

カッコウ、ツツドリおよびホトトギスは胸に横斑があるが、本種は無斑である。

分布の概要

ウスリー地方からインド、東南アジアまでに分布する。日本には夏鳥として渡来するが少ない。カッコウはユーラシアの中緯度帯から高緯度帯までと、アフリカに分布する。ツツドリはユーラシアの中部から東部および東南部に分布する。ホトトギスはユーラシアの東南部に分布する。

県内の生息状況

夏鳥として山地の林に渡来する。春秋の渡り時期は平地にも現れる。個体数は少ない。

生態的特性

山地の自然林を生息環境とする。
自分で巣を造らず、コルリ、コマドリ、オオルリなどの巣に托卵する。夜間もよく鳴く。

生存に対する 脅威・保護対策

スギの植林等、山林開発による自然林の減少。

トラフズク

Asio otus

フクロウ目フクロウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

平地林の減少に伴い、渡来数が少ない。

形 態

全長 38cm、翼開長 95cm。顔はフクロウに似るが、顕著な羽角がある。目の虹彩は赤褐色。上面は灰褐色で下面は黒褐色の縦斑がある。

近似種との区別

フクロウは羽角がなく、虹彩は暗色。コミミズクは短い羽角を持つが虹彩は黄色である。

分布の概要

ユーラシアおよび北アメリカに広く分布し、北で繁殖するものは冬季南へ移動する。北海道、本州で繁殖し、県内には冬鳥として渡来する。コミミズクはユーラシアおよび南北アメリカに広く分布する。

県内の生息状況

川島町、板野町、那賀川町などで記録があるが、極めて少ない。

生態的特性

農耕地、河川敷、公園、森林を生息環境とする。
日中は林の中で眠り、夜間活動する。農耕地、河川など開けた場所で、主にネズミ類を捕食する。

生存に対する 脅威・保護対策

平地における樹林の減少。

オオコノハズク

Otus lempiji

フクロウ目フクロウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息数が極端に少ない。

形 態

全長 25cm。雌雄ともに茶色みを帯びた暗褐色で、枯れた木の葉模様。優れた保護色となっている。耳のように見える羽角があり、目の虹彩は濃いオレンジ色。

近似種との区別

外見上よく似たコノハズクは、本種より小さく、目の虹彩が黄色である点区別は容易。トラフズクは全長が 38cm で、本種よりずっと大きい。ただし、羽角を持つ点と虹彩の色が似ているので識別は要注意。

分布の概要

サハリン、千島列島、日本およびウスリーからインドまでのユーラシア南東部、インドネシアなどに留鳥として周年生息する。日本では全国の山地の林に留鳥として少数が生息している。フクロウやアオバズクと並んで、洞（うろ）をもつ大径木のある里山の林や、社寺林に生息する。

県内の生息状況

平地から標高 1870m の木屋平村一ノ森でも記録されている。自然林の減少とともに生息数は極めて少ないものと思われる。

生態的特性

よく繁った山地の林や社寺林などに生息する。洞をもつ大径木やキツツキ科の鳥の古巣等が繁殖には不可欠な要素である。

留鳥として全国各地の山地の林に周年生息する。鳴き声は、低い声で「ウー、ウー」とか「ウオッ、ウオッ」と聞こえる。日中は、よく繁った林の地上の茂みなどにおいて、外敵が近寄ると音も立てずにフワッと飛び立つ。木の洞や、例えばアオゲラやアカゲラなどキツツキ科の鳥の古巣を営巣場所として利用することがある。また、巣箱を利用することもある。渡りを行うので、春秋の渡りのシーズンには平地の茂みなどで発見されることがある。

生存に対する 脅威・保護対策

餌となる昆虫類や、小鳥類、ネズミ類などの小動物が豊富にいて、営巣木となる大径木が繁る自然林の消滅。

アオバズク

Ninox scutulata

フクロウ目フクロウ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息適地が減少しており、今後とも個体数の減少が続くと予想される。

形 態

全長 29cm。全身黒褐色をベースにして黒っぽい、下面は白地に黒褐色の縦斑がある。目の虹彩は黄色。鋭い爪をもつ足指も黄色っぽい。

近似種との区別

全身の色彩と大きさ、および夜行性である点からヨタカと誤るおそれがあるが、ヨタカにはフクロウ科特有の平らな顔、つまり顔盤がないので、容易に区別できる。

分布の概要

ウスリーから朝鮮半島にかけて、およびインドシナ半島、インド、日本、フィリピン、インドネシアなどに繁殖分布する。日本では全国の低山帯に夏鳥として渡来する。フクロウやコミミズクと並んで、意外にも人家に近い林地に生息している。コミミズクは農耕地や荒地など平地にすむが、本種は比較的大径木の残る神社の杜などで繁殖していることがある。

県内の生息状況

平地から標高 1400m 付近の林で記録されている。洞（うろ）をもつ大径木の減少とともに個体数が少なくなっている。

生態的特性

洞をもつような大径木のある低山帯の林で、餌となる大型昆虫類が生息している環境を生息環境とする。毎年 4 月上旬頃、決まった営巣木に繁殖のため帰ってくる夏鳥。さえずりは必ず 2 声ずつ「ホーホー、ホーホー」と鳴く。主食はコガネムシ、カブトムシ、セミなどの大型昆虫類で、飛翔中のものを捕らえて食べる。10 月までにはフィリピンなど、東南アジア方面へ渡去する。

生存に対する 脅威・保護対策

神社の杜や、大型昆虫類が飛び交う豊かな里山の自然の消滅。

オオアカゲラ

Dendrocopos leucotos

キツツキ目キツツキ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

生息適地が減少し、生息数も減少している。

形 態

全長 28cm。樹幹に体を固定する必要上、対趾足と尾羽がよく発達している。強力な嘴と長い舌をもつ。雄は頭頂部全体が赤いが、雌のそれは黒い。上面の白黒模様は細かく、際立って大きな白斑はない。胸から脇腹にかけての黒い縦斑が特徴。

近似種との区別

同じキツツキ科内において、アカゲラとは、本種の胸から脇腹にかけて黒い縦斑があることによって、アオゲラとは上面の色の違いで識別できる。コゲラは全長が 15cm と小さいことから区別できる。

分布の概要

日本では、奄美大島以北のうっそうとした広葉樹林や針広混交林に留鳥として生息する。渡りは行わない模様。アカゲラやアオゲラ、コゲラなどの近縁種とは分布域がよく重複しているが、本種の方がより自然度の高い森林、つまり種の多様性がよく保たれた森林に好んで生息する。すなわち、すみ分けが行われている。

県内の生息状況

標高 700m くらいから、1500m くらいまでの森林に少数が生息している。

生態的特性

樹齢数百年の広葉樹林や針広混交林で、ある程度の空間的広がりをもつ森林に周年生息する。大木の樹幹をずり上がりながら採食する。甲虫類の幼虫や成虫を好んで食べる。巣穴は樹冠に近い高所に掘る傾向があり、地上からは見にくいことが多い。かん高い声で「キョッ・キョッ」と鳴いたり、よく響く特定の枯れ木などを激しくつつくドラミングをさえずり代わりに行う。

生存に対する 脅威・保護対策

森林伐採や林道の建設などによる生息適地の破壊や分断化の進行。

アカモズ

Lanius cristatus

スズメ目モズ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

絶滅危

選定理由

県内では春秋の渡りの際、少数が通過するのみである。

形態

全長 20cm。鋭くカギ形に曲がった上嘴（じょうし）と黒い過眼線、頭頂部から背、尾羽まで上面が赤褐色をしている。下面は白く、上面との色彩のコントラストが鮮やか。

近似種との区別

オオモズやオオカラモズは体が大きく、全体に白っぽく見えるので区別は容易である。チゴモズとは頭頂部の色が異なる。最もよく似たモズは、上面の背から尾羽にかけて灰褐色みがあることや、脇の茶色みが強いことで区別できる。

分布の概要

アジア極東部や日本の本州中部以北などに繁殖分布する。冬季は、インドシナ半島を中心とした東南アジアの熱帯、亜熱帯地域に渡り越冬する。オオモズは北半球の大陸に広く分布しているが、その他の上記モズ科 3 種とはアジア東部によく重複して分布している。しかし、オオモズ、オオカラモズ、チゴモズは日本ではまれである。

県内の生息状況

阿南市や那賀川町、牟岐町など県東部の海に近い平地や離島で、10 例ほど記録されている。

生態的特性

本州中部以北の高原など、見晴らしのきく平坦地に、カラマツ林やかん木がまばらに散在するような環境を好む。

日本へは、夏鳥として 5 月頃繁殖地に渡来する。ちょうど近縁種で留鳥のモズの繁殖終期に当たり、両種の繁殖活動上の軋轢を回避する効果があるのかもしれない。目立つ位置にとまって尾羽を回転させるように動かしながら、「ギチギチギチギチ・・・」とやや控えめなテリトリーコールを行う。

生存に対する脅威・保護対策

県東部、沿岸地域の開発に伴う平地林の減少。

カヤクグリ

Prunella rubida

スズメ目イワヒバリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境庁カテゴリ

該当なし

選定理由

個体数が少なく、本県が繁殖地南限に近いという意味において貴重である。

形態

全長 14cm。雌雄同色。全身暗い茶褐色で、胸から腹は灰色味を帯びる。背に茶褐色の濃淡による縦筋があり、頬には細かい白点が見られる。

近似種との区別

全身が黒っぽいことから、カワガラスに似るが、本種はカワガラスのように溪流に潜ることはない。また、クロジとは嘴の形状や、頬の白点の有無によって区別できる。

分布の概要

四国から南千島にいたる山岳地帯でのみ繁殖分布する準日本固有種である。本県では夏季、剣山とその近隣の高山でさえ姿を見聞することがあるが、冬季は低山帯に下りる。イワヒバリは日本では、本州の中部と北部の主として標高 2000m 以上の岩石地帯に繁殖分布する。ヤマヒバリはユーラシアのタイガ地域に広く繁殖分布するが、日本へはめったに渡来しない。

県内の生息状況

1976 年に剣山の標高 1920m 付近で、生い茂ったクロツルの枝上で 3 雛が育つ巣が四国で初めて発見された。その後、石鎚山（愛媛県）でも本種の繁殖が確認された。剣山では現在まで毎夏その生息が確認されているが、1976 年以外に繁殖記録は得られていない。

生態的特性

夏季は森林限界に近いハイマツ帯で繁殖し、冬期は平地の山麓に下りる。

繁殖期の雄は、目立つ位置に止まり、金属的な声で「チョッチョッチリリ…」と聞こえる声でさえずる。冬季は山麓の、近くに水の流れがあるような谷筋の地上で草本類の種子などを採餌している。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖が確認されている剣山および近隣の高山の自然のバランスを壊す無秩序な人間の立ち入り。

コマドリ

Erithacus akahige

スズメ目ツグミ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

県内での繁殖適地は限られている上に、個体数も多くない。

形態

全長 14cm。胸や上面が鮮やかな赤褐色。腹は灰色。雌は全体に色が薄い。

近似種との区別

体色に一部赤褐色味をもつことから、ジョウビタキやアカハラ、アカコッコ、マミチャジナイ等に似ている。しかし、いずれの種と比較しても、本種の方が頬や喉、胸が鮮やかな赤褐色であることによって区別できる。

分布の概要

伊豆七島や屋久島以北、サハリン、千島列島までの落葉広葉樹林や亜高山帯針葉樹林に夏鳥として渡来し繁殖する。冬季は中国南部などへ渡る。日本特産種のアカヒゲと上面の赤褐色が酷似するが、両種はすみ分けていて、分布は重なっていないとされている。アカヒゲは種子島、トカラ列島、奄美大島、琉球列島の島々、男女群島などの深い森林中に周年生息する。一方、本種は伊豆七島や屋久島以北、サハリン付近までに渡来し繁殖する。(伊豆七島と屋久島に分布するのは主に亜種タネコマドリである)。

県内の生息状況

夏鳥として4月上旬に渡来し、剣山山系を中心とした亜高山帯針葉樹林で少数が繁殖する。その後、9月下旬までには渡去する。

生態的特性

県内では夏季、標高 1300m ~ 1800m 付近の亜高山帯針葉樹林に渡来し、繁殖する。春の渡りの時期には、平地の山麓を通過することがある。主に、亜高山帯針葉樹林で繁殖する。「駒鳥」の名の通り、馬のいななきを連想させる「ヒンカラララ…」と聞こえるさえずりが特徴。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖地となっている剣山山系を中心とする落葉広葉樹林や亜高山帯針葉樹林の伐採など。

ルリビタキ

Tarsiger cyanurus

スズメ目ツグミ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

剣山山系で繁殖する個体群は日本での繁殖南限に近いという意味において貴重である。

形態

全長 14cm。雌雄異色。雄成鳥は上面がりり色、下面は汚白色。雌は全体にオリーブ褐色で地味。雌雄とも脇の橙黄色が顕著。雄の若鳥は雌に似る。

近似種との区別

コルリやオオルリと雄の色彩パターンが酷似するが、ルリビタキにある脇の橙黄色が前2種にはない。

分布の概要

種としては、ヒマラヤ山脈やユーラシアの亜寒帯地域に広く分布する。日本では、四国や本州中部以北の亜高山帯から高山帯の針葉樹林で繁殖する。冬季は平地の林の地上付近に普通。ユーラシア東部において、コルリやオオルリの分布域と重複する。両種とも日本では夏鳥であって、冬季に生息することはない。夏季の繁殖期においては、両種ともルリビタキの分布域より標高の低い山地にすむが、コルリとは分布域が重複する場合もある。また、冬季は冬鳥のジョウビタキの分布域ともよく重複している。

県内の生息状況

留鳥として年間を通して生息するが、越冬個体群と、繁殖個体群が同一だという確証はない。

生態的特性

県内においては夏季、剣山山系などの標高 1600m 以上の林で繁殖し、秋冬季は平地の山麓に普通。亜高山帯から高山帯にかけての針葉樹林で繁殖する。暗い林床付近にいて、昆虫類やクモ類を捕食する。崖地や窪みに営巣する。さえずりはゆったりしたテンポで「ヒツヒョロヒョロヒョロリ」と聞こえる。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖が確認されている剣山山系の亜高山帯針葉樹林の伐採など。

メボソムシクイ

Phylloscopus borealis

スズメ目ウグイス科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

県内の繁殖地が限られており、個体数も少ない。
本県では、繁殖地の南限に近いという意味においても貴重である。

形 態

全長 13cm。上面はオリーブ色、下面は淡い黄緑色。白い眉斑が顕著。頭中央線はない。

近似種との区別

センダイムシクイには頭中央線がある。エゾムシクイは茶褐色みがあり、さえずりも違う。イイジマムシクイやキマクムシクイ、カラフトムシクイ等は分布が局所的であったり、さえずりや腰の色が相違する。

分布の概要

亜種メボソムシクイ (*P.b.xanthodryas*) は、日本では大分県以北で繁殖する。越冬地は、中国南部やインドシナ半島、フィリピン、インドネシアなどである。種としては、ユーラシアからアメリカ合衆国のアラスカ州にかけての亜高山帯針葉樹林や、高山帯かん木林等に分布する。日本では、センダイムシクイは低山帯の里山に、エゾムシクイはブナ林等にそれぞれ渡来し繁殖する。(亜種コメボソムシクイ (*P.b.borealis*) が、5月下旬ごろ県内を通過する)。

県内の生息状況

大部分は通過個体ばかりで、繁殖する個体群は少ない。

生態的特性

夏季は本州、四国地方の亜高山帯で繁殖し、春秋の渡りの時期には平地の林を通過することがある。亜高山帯から高山帯で繁殖する。針葉樹林やかん木林の林床付近にいて、主に昆虫類を捕食する。崖地や窪みに営巣する。「ジョリジョリジョリジョリ…」と聞こえる声でさえずる。

生存に対する 脅威・保護対策

繁殖が確認されている剣山や、その近隣の亜高山帯針葉樹林の伐採など。

ノジコ

Emberiza sulphurata

スズメ目ホオジロ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環 庁カテゴリ

絶滅危

選 定 理 由

県内では春秋の渡りの際、少数が通過するのみである。

形 態

全長 14cm。全体に黄緑色に見え、雌雄同色だが、雄の方が色彩が濃い。特に目先の黒色は雄で顕著。目の周囲が「こ」の字形に白いのが特徴。

近似種との区別

アオジに酷似する。アオジには前胸部から両脇にかけて黒褐色の縦斑が明瞭。また、ノジコの特徴である目の周囲の白い「こ」の字形の縁取りはアオジにはない。春季に聞かれる両種のさえずりにも明らかな違いがある。アオジのさえずりには鈴を振るような音色があるが、ノジコのそれには、必ず「チー・チー」と2声の前奏が入る。

分布の概要

世界でも、本州のごく一部の山地にしか繁殖地をもたない。冬季は中国南東部や、フィリピン、台湾などへ渡り越冬する。日本で見られる近縁種の多くは、ユーラシア北部や東部に広く分布しているが、日本列島に固有な種は本種のみである。

県内の生息状況

春秋の渡りの時期に、10羽足らずの小群が、平地や丘陵地の林縁部を通過するのが確認されるだけである。特に、阿南市の伊島では毎年4月下旬頃、少数が通過するようである。秋季は特徴がはっきりしないためか、発見例が少ない。

生態的特性

本州の山地で、高原状の斜面など、見晴らしのよい明るいシラカバ林の林縁部などにすむことがある。渡り途上においても、林縁部の草地など地上付近で生活していることが多い。
夏鳥として本州の山地（標高 700 ~ 1200m）に局地的に渡来し、繁殖する。かん木の梢などで胸をそらし、朗らかにテリトリーソングを繰り返している。採餌はブッシュの中で観察しにくい。春の渡り途上には、すでにペアリングできているらしく、コートシップ・フィーディング（求愛給餌）することがある。

生存に対する 脅威・保護対策

生息地である里山林の減少。

イスカ

Loxia curvirostra

スズメ目アトリ科

徳島県カテゴリ

絶滅危

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

個体数が少なく、特に近年になってほとんど発見例がなくなった。

形態

全長 17cm。雌雄異色。上嘴と下嘴がその先端部で食い違っている。翼に白帯はない。雄は頭部および下面が暗赤色をしているが、雌は全体に黄色みのある緑がかかった地味な体色である。

近似種との区別

ナキイスカは一回り小さく、翼に 2 本の白帯がある。体色に赤みがある点、ベニマシコやウソ、ギンザンマシコ、オオマシコ、ハギマシコ、ベニヒワ等に似るが、嘴先端部の食い違いの有無で区別は容易である。

分布の概要

種としては、ユーラシアや北アメリカの北部など北半球に広く分布する。冬季、日本全国の低山帯の森林、特に、マツ林に冬鳥として渡来する。近縁種としてナキイスカがあり、分布域はイスカより狭いが、よく重複している。日本ではナキイスカは極めてまれな鳥で、北海道の一部など極限られた地域に断片的に記録されているのみである。

県内の生息状況

本県への渡来数は極めて少ない。讃岐山脈側の三好郡三野町の大川山（標高 1043m）や、美馬郡脇町の大滝山（標高 946m）などで 10 羽前後の渡来記録がある。佐那河内村では 1997 年に約 80 羽が飛来した。

生態的特性

アカマツやクロマツ、エゾマツ、トドマツ等針葉樹の種子や、ダケカンバ、ヤマハンノキなどの球果を好むことから、それらが生育する森林に生息する。樹上生活が主である。マツの球果をもぎ取り、その独特の嘴を器用に使って種子を取り出して食べる。越冬中は、常に群れ生活を営んでおり、群れで飛行中は絶えず「ピュピュッ」とか「チュチュッ」と聞こえる声で鳴き交わしている。

生存に対する脅威・保護対策

繁殖地における自然環境の悪化。

ヒメクイナ

Porzana pusilla

ツル目クイナ科

徳島県カテゴリ

報不足

環境カテゴリ

該当なし

選定理由

国内での生息数が少ない。県内への渡来数も少なく、分布、生態等がよく分かっていない。

形態

全長 19.5cm。小さくずんぐりした体型で、のどから腹にかけては灰色。茶色の背中に白黒の小斑がある。足は暗緑色、嘴も暗緑色で短い。

近似種との区別

クイナはずっと大きく（全長 29cm）、嘴は長めで赤い。シマクイナはずっと小さく（全長 12.5cm）、頭から尾まで全身に小白斑がある。

分布の概要

中央アジアから東アジア、アフリカ、オセアニアなどに分布。日本には本州中部以北に夏鳥として渡来し、国内の他の地域では渡り途中のものなどが観察される。

県内の生息状況

少数が平地の水田、河川、ヨシ原などの湿地に渡来すると考えられるが、観察例が少なく不明な部分が多い。

生態的特性

水田、沼地、河川のヨシ原を生息環境とする。本州北部以北で繁殖する。水田やヨシ原を歩き回り、昆虫や貝類、植物の種子を探して食べるが、草むらの中にいることが多く、発見されることは極めて少ない。

生存に対する脅威・保護対策

湿地の減少。

アオシギ

Gallinago solitaria

チドリ目シギ科

徳島県カテゴリ

報不足

環境カテゴリ

該当なし

選 定 理 由

個体数が少なく、県内への渡来数も極めて少ないと考えられる。

形 態

全長 30cm。嘴はまっすぐで長い。体の上面は黒味のある褐色で、白い小さな斑点がある。下面は淡色。

近似種との区別

オオジシギ、チュウジシギ、ハリオシギ、タシギとは、本種の胸がオリーブ褐色であることで区別できる。

分布の概要

シベリア南部、モンゴル、中国西北部などで繁殖し、冬季は南へ移動する。日本には冬鳥として渡来するが少ない。オオジシギは、南樺太と日本で繁殖。チュウジシギは、中部シベリアで繁殖。ハリオシギはシベリアのほぼ全域で繁殖する。

県内の生息状況

佐那河内村の圃瀬川などに冬季渡来記録がある。個体数は極めて少ないと考えられる。

生態的特性

山地の溪流、湿地を生息環境とする。
溪流に渡来し、水辺の小動物を捕食する。単独でいることが多い。

生存に対する 脅威・保護対策

河川上流部の護岸工事、ダム建設など。